

## かわじ 川地遺跡

**調査の経過** 川地遺跡は、渥美郡渥美町大字亀山字川地に所在する。本遺跡は渥美町の中心地である福江と伊良湖岬のほぼ中間に位置し、標高4mほどの台地縁辺部に立地している。台地東側には丘陵地をひかえ、西側には沖積平野が広がっている。

発掘調査は県道堀切・中山線の建設に伴う事前調査として、愛知県土木部道路建設課より愛知県教育委員会を通じて委託を受け、調査面積840㎡を平成5年4月から7月にかけて実施した。

なお、本遺跡は従来「川地貝塚」の名称で呼ばれてきたが、渥美町教育委員会発行の報告書にならい「川地遺跡」とした。(神谷知幸)

**過去の調査** 川地遺跡は、大正11年(1922)に清野謙次により調査され、縄文時代後期の貝塚として知られるようになった。この調査では、24体の埋葬人骨をはじめ、縄文後期の土器、石錘、石鏃等の石器、魚骨製の耳飾、骨角器、貝輪等の遺物が多数出土している。特に人骨に関する記録は、『人類学雑誌』に詳しく報告されている。

平成3年(1991)には、渥美町教育委員会により当調査区の北側と南側の360㎡が調査され、土墳墓、溝等の遺構が検出されている。遺物は縄文土器、石器、牙飾等の人工遺物と獣骨、魚骨、貝等の自然遺物が出土している。

**調査の概要** 調査区の基本層序は、上層から表土、耕作土、黒褐色土層、黄橙色土層(基盤)である。縄文時代の遺物包含層である黒色土層の堆積は厚いところで約30cmあり、調査区西部は耕作による攪乱を受け遺存していない。



第1図 川地遺跡調査区位置図(1:5000)

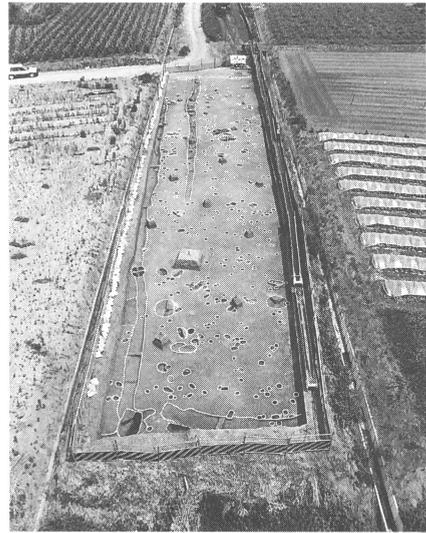


第2図 川地遺跡遺構図 (S=1/250)

今回の調査では、土坑墓、土坑、溝等の遺構が検出された。遺構にともなって出土した遺物は少なく、時期の特定ができない遺構も少なくない。遺物は縄文時代だけでなく中世、戦国時代のものも出土している。

#### 遺 構

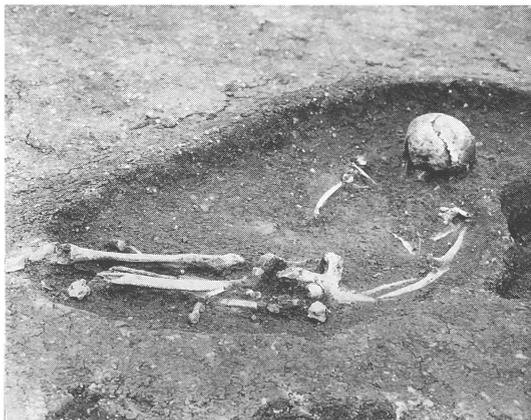
大正11年の調査では、貝層は厚いところで45cmほど残っていたと報告されているが、最近の耕作により攪乱を受け、わずかに破砕貝の散布が認められるだけであった。破砕貝及び獣骨、魚骨は調査区北西の台地端部に偏って散布しており、貝塚はこの付近に形成されていたと推定される。



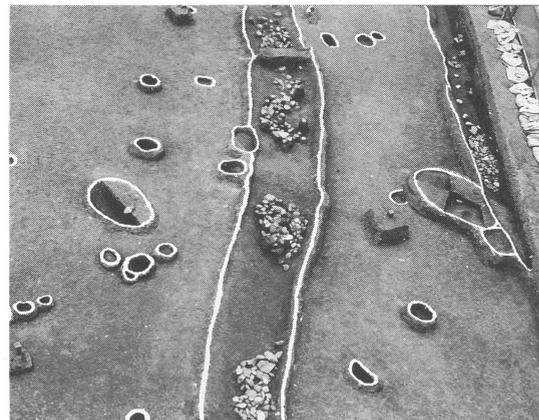
調査区全景

調査区北西部では、土坑墓を1基検出した。土坑の規模は95cm×57cmを測り、平面形は楕円形を呈する。人骨の埋葬形態伏臥屈葬で、頭位は北東である。人骨の遺存状態は比較的良好で、ほぼ完全な状態で各部位の骨を取り上げることができた。平成3年度の渥美町教育委員会の調査でも、当調査区北側に隣接する調査区の台地端部付近で土坑墓が2基検出されていることから、貝塚と重複するように台地端部に墓域が展開していたものと考えられる。

溝は3条検出された。調査区北壁に沿って検出したS D02は、調査区北西端部でL字状に屈曲し、渥美町教育委員会の調査で検出された溝(S D01)に続く。屈曲部分には1.4m×1.0m、深さ1.1mを測る長方形の土坑が掘り込まれている。S D01はS D02にほぼ並行し、S D03と直交する。S D01とS D02からは、礫とともに縄文時代の石器が大量に出土した。出土状況は複数のブロックに分けられ、まとめて投棄されたものと考えられる。石器に混在して戦国期の天目茶碗、播鉢等の遺物が出土しており、溝は戦国期のものと考えられる。



人骨検出状況



S D01・02遺物出土状況

遺物

今回の調査で出土した遺物は、縄文土器、石器、中世及び戦国時代の陶器、人骨、獣骨、魚骨等の自然遺物がある。

縄文土器は黒色土層より出土したものが多く、遺構に伴うものは少ない。中期と晩期の土器が若干みられるが、大半は縄文時代後期に属するものである。特に堀之内式から加曾利B式に並行するものと元住吉山式から宮滝式に並行するものが主体となっている。

石器は黒色土層だけでなく戦国期の溝（S D01～03）からも多く出土している。最も多いのは石錘で、本遺跡の石器組成の特色となっている。偏平な礫の両端を打ち欠いた切り目石錘が主体で、有溝石錘は少ない。法量は7cm前後の中型品が主体で、10cm以上の大型品、4cm以下の小型品もある。他に石鏃、磨製石斧、凹石、磨石、石棒の破片等がある。打製石斧がほとんどみられないのも特色であろう。また、円礫を打ち欠いてつくられた用途不明の剥片が多く出土している。細部調整はほとんど施されない粗雑なもので、自然面をそのまま残している。

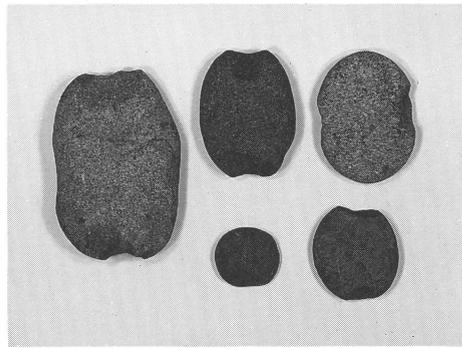
貝製品では、貝輪が2点出土した。いずれも約1/2を欠損しており、表面は著しく磨滅している。

まとめ

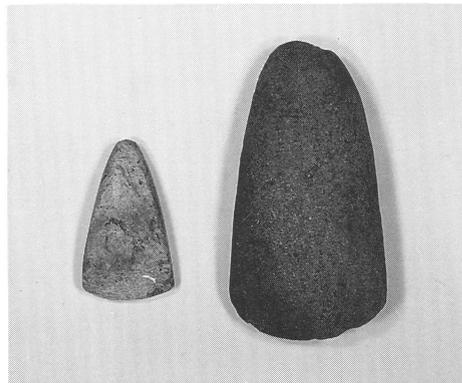
川地遺跡は、著名な吉胡貝塚や伊川津貝塚などに先行する縄文時代後期の貝塚として位置づけられている。今回の調査では、貝層が攪乱を受け遺存していなかったこともあり、貝塚の明確な時期比定はできなかったが、出土土器からみる限り縄文時代後期に形成された可能性は高い。渥美半島では、晩期に多くの貝塚が形成されるが、それらに先行して形成された貝塚としてその意味は重要なものであろう。

また、今回の調査では縄文時代の遺構だけでなく、戦国時代の溝も検出された。3状の溝は屋敷地等を区画する溝と考えられ、S D02によって区画される範囲、S D01とS D03によって区画される範囲の2つの敷地の存在が想定される。

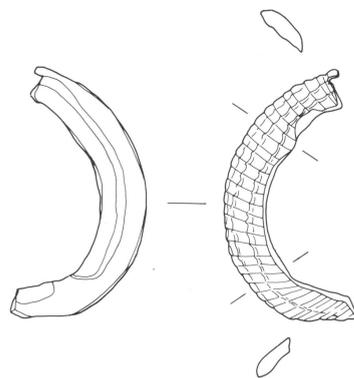
(原田 幹)



石錘



磨製石斧



第3図 貝輪実測図 (S=1/2)